昔の葬儀

文　小島善之丞
絵　徳永　良行

（葬儀に必要なものは、手伝いの人の手造りで段取りをした）

手造りで造った物の説明

1図、お墓にお供物をする品物をのせる膳、右膳の上から見た図、左斜横から見た図。

2図、お墓にお供物をのせる机。

3図、六地蔵、葬儀のときお墓の人口の道端に立てる。

4図、灯籠の形。

5図、墓標四寸角（約一二センチ角）

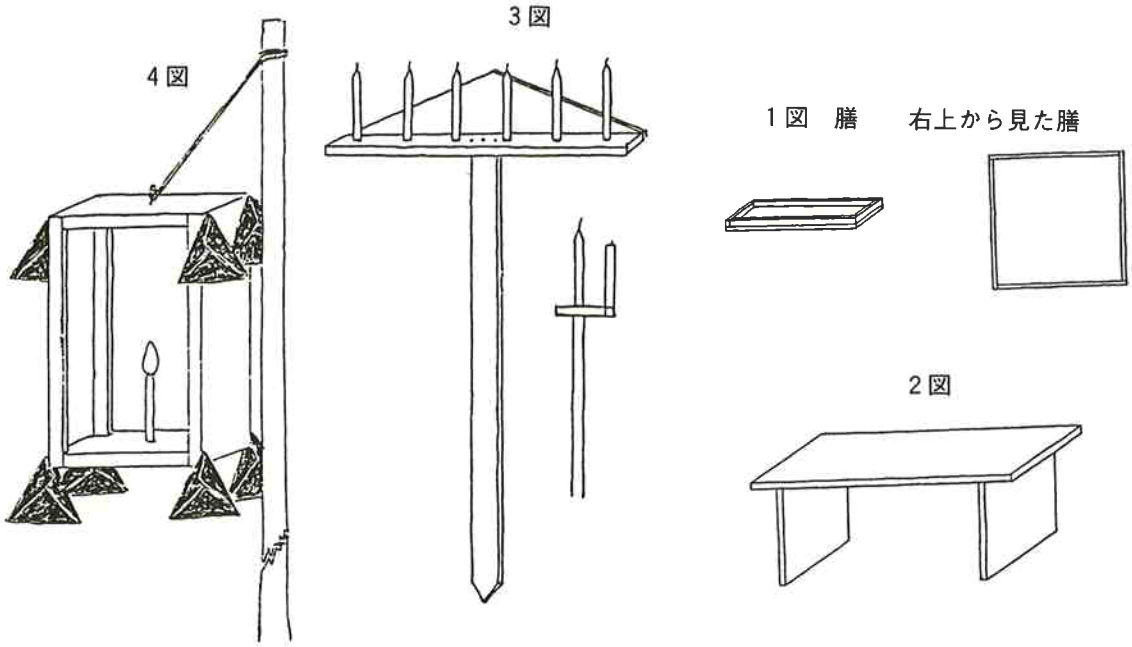
6図、卒塔婆。右も左も

7図、たつがしらの正面

8図、龍頭と人との比較

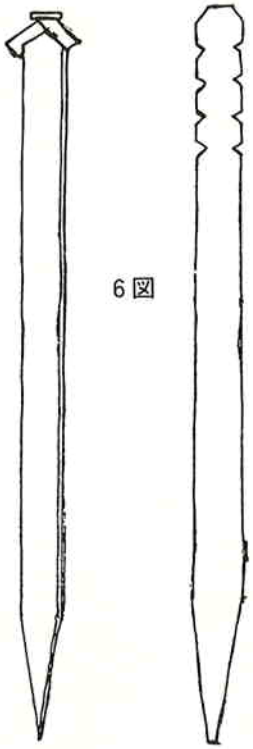
9図、たつがしらの全体像

10図、登旗四流と人との比較及び燈籠二つと人との比較



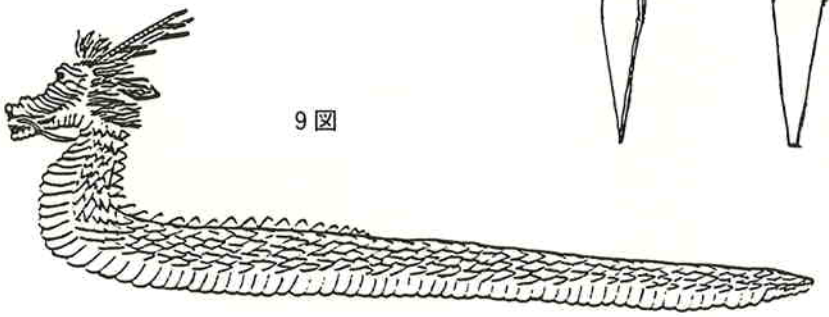
8図

7図



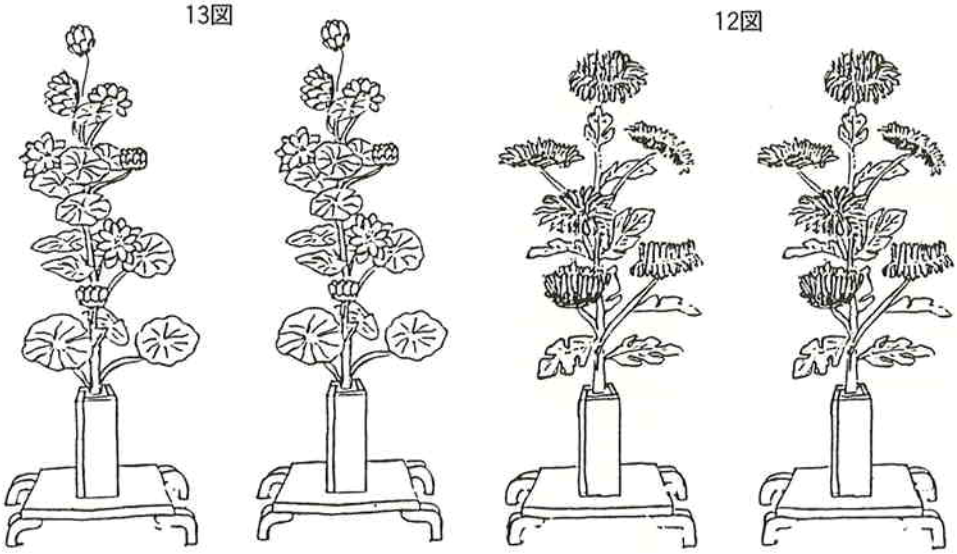
6図

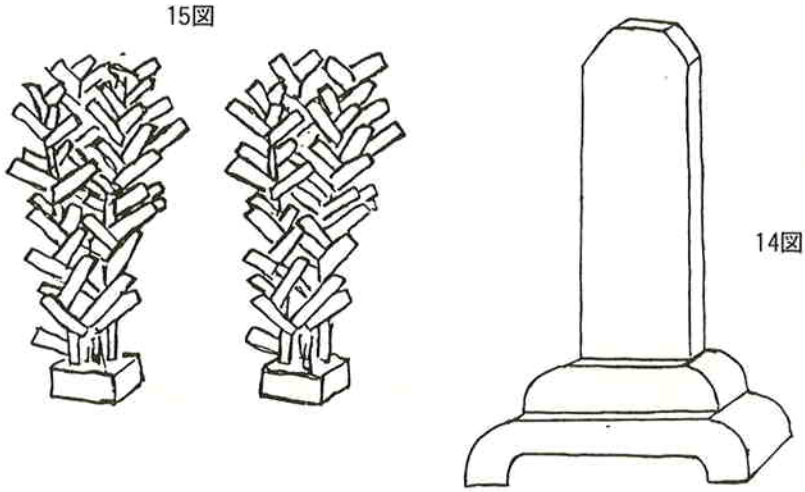
5図



9図

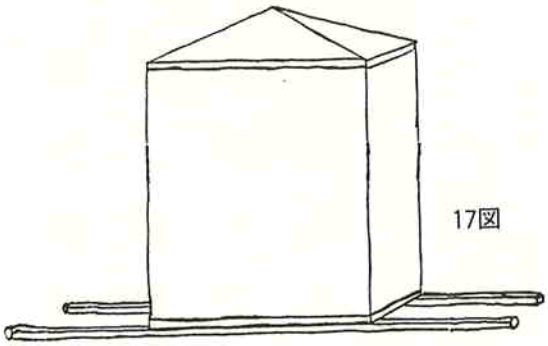
10図





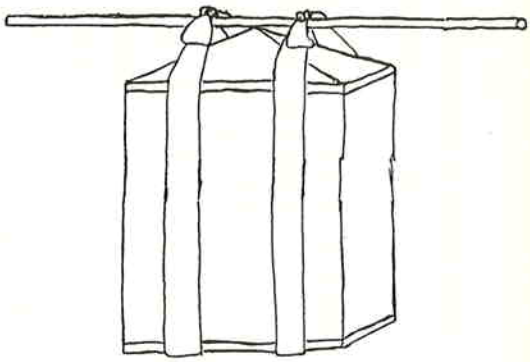
12図、菊の花二つ。
13図、蓮の花二つ。
14図、位牌
15図、四花
16図、最も簡単な造りの棺、晒し木綿で吊り下げる。
17図、簡単な四人で担ぐ棺・立棺死者坐らす。
18図、少し体裁よく飾った棺、上を天蓋と言い、下を輿と言う。立棺死者坐らす。
19図、天蓋と輿がかなり派手になった棺、昭和一三年の写真より、死者坐らす。
20図、は火葬場の建物ができて、窯が据え付けられてから、死者を寝かせて入れる寝棺となった。

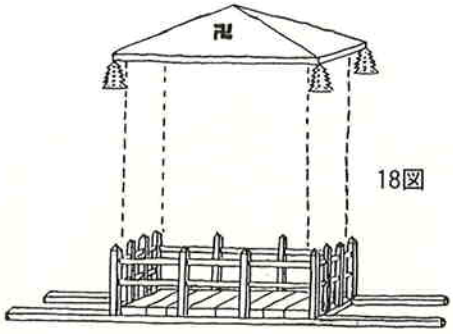
時代が進につれて、天蓋も輿も段々と派手になり、造る人の腕前の見せどころとばかり頑張って造った。
棺には、基準と言うものがなく、様々に飾って死者を弔った。



17図

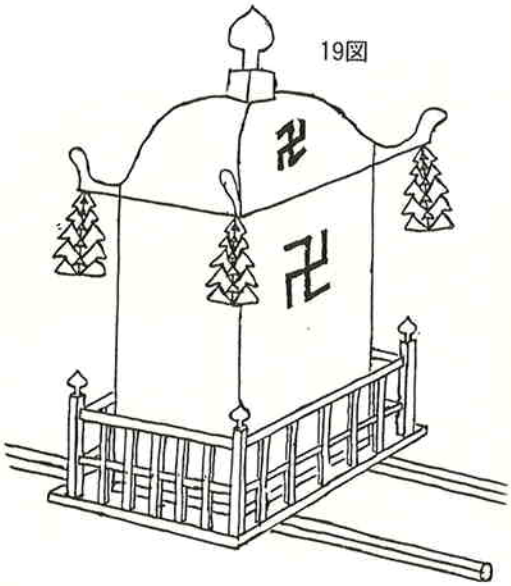
16図

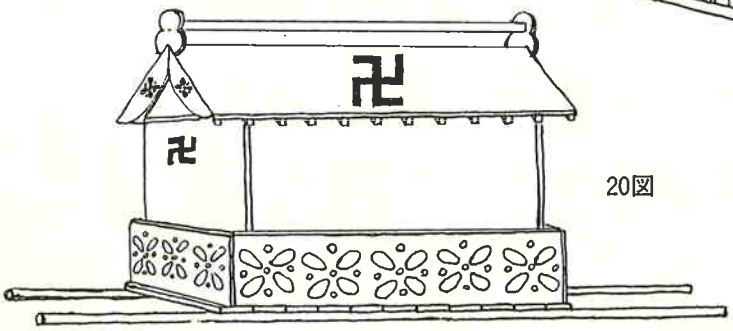




18図

19図





20図

諸行無常

是生滅法

生滅々己

寂滅為楽

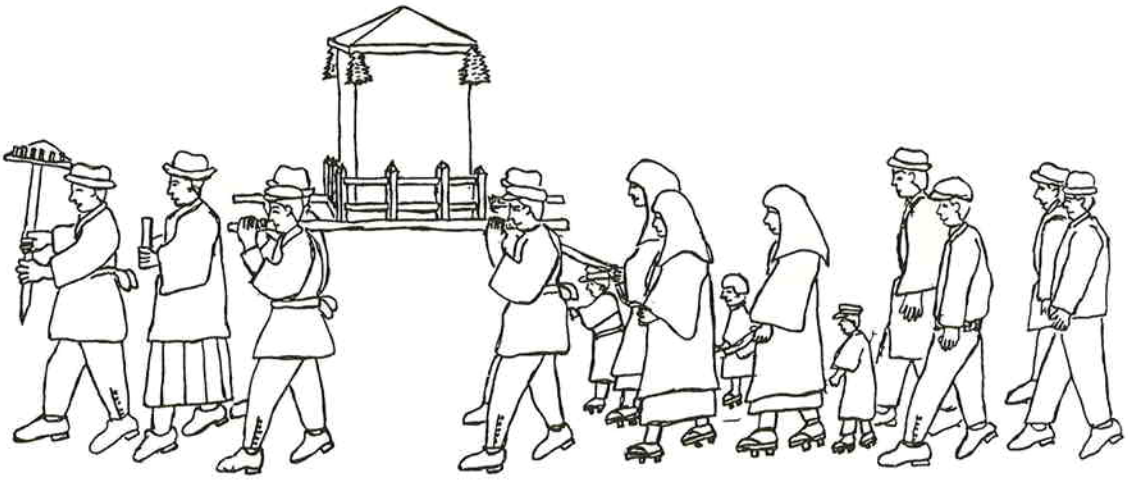
登り旗の字の説明（古沢英順氏提供）

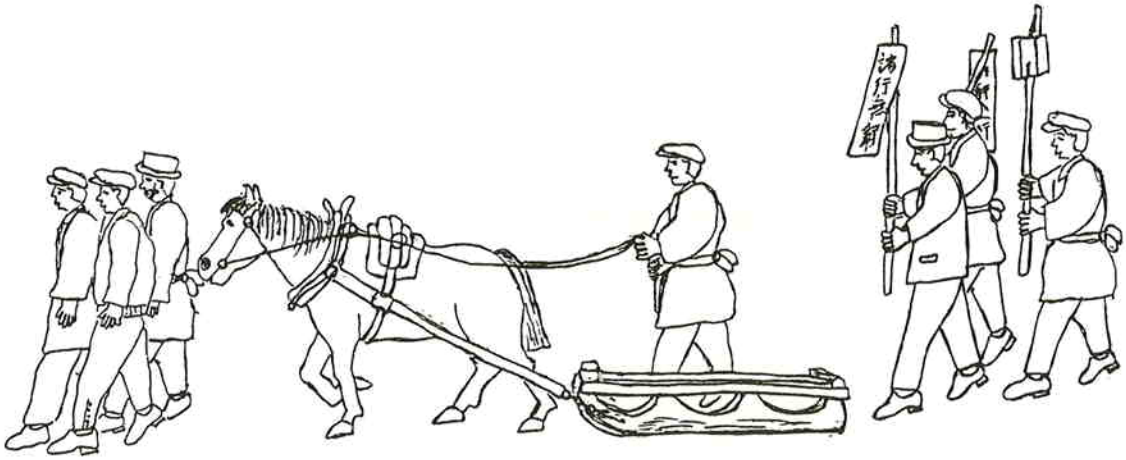
1、諸行無行（しょぎょうむじょう）
　この世のすべての物事は、たえず移り変って、一瞬の間も同じ姿を保つことがない。人生は、はかないものであるという、仏教の根本思想、諸は万物

2、是生滅法（ぜしょうめっぽう）
（仏）、万物は、すべて変転生滅して、常住不変ではない、の意、「初夜の鐘をつくときは、諸行無常と響くなり、後夜の鐘をつくときは、是生滅法と響くなり。

3、生滅々己（せいめつめつい）
（仏）、生滅してやまないこの世の、超越すること。

4、寂滅為楽（じゃくめついらく）
（仏）、生に執着する苦悩をはなれて、寂滅の境地を楽しむ。





近代化されない頃の葬儀

小島善之丞

自家用車も、電話も個々の家にない時代、町内又は、組内に、誰かが亡くなるという不幸が出来た場合は。隣近所の人達が先づ気を効かせて、組内に知らせるのは、今も昔も変わりないが、昔はテクテクと歩いて行くので時間がずい分かかった。

組内の者が集まったら、それぞれの役割分担を決めるのも今と変りはないが。全く今の時代と違ったことというものが、ずい分沢山ある。

故人の親戚が、村内にあれば、組内の人が二人づつの組で知らせに行き、村外は電報を使って知らせたが、近代は、直き隣の家から、九州沖縄までも電話で知らせる時代になってしまった。葬式に関係しての要件に歩くのは、必ず二人づつと決まっていたのは。色々な理由があったのだろうが、これは、佐呂間に移住された先祖達が、内地から持ち込んだ仕来たりであると思われます。一人より二人の方が完全な知せが出来るということもあるでせうが、使いに行く者は、昼間も提灯（ちょうちん）を持って行くことになっていた。

いよいよ組内又は、町内の人達が集まったら、葬式についての段取に取りかかる。それぞれの技能によって手造りによるのであって

葬列の説明

1番先、灯籠一つ
2番目、登り旗2流
3番目、蓮の花と菊の花、
4番目、籠頭（たつがしら）
5番目、四花
6番目、六地蔵（ローソク六本立て）
7番目、位牌
8番目、棺
9番目、故人の親族が長い晒木綿を棺からつないだのをそれぞれ手に持って行く。
10番目、参列の人々
11番目、葬列が終って墓まで、棺外荷物引いて行く馬橇又は土橇。
12番目、登り旗二流
13番目、灯籠一つ

棺。墓標（約一二センチ位いの角材）。卒搭婆（墓の後に立てる細長い板）。輿（こし）（棺を乗せて担ぐもの）。天蓋（てんがい）（棺の上に乗せるもの）お墓に供え物をのせる机。膳。灯籠。六地蔵（六本のローソクを立てるもので、入口に立てて、火を灯し墓地まで持って行く）。竜頭（たつがしらと言う。魔除けの意味のもので、藁で造る人、板で造る人等様々であった。仏教でも、竜頭を使わない宗教もあった）。葬式に供え飾る造花類等も手造りだった。四花・蓮。菊等。旗四流

使いの役目になった人は、木工場に板、柱等買いに行き。文房具店か雑貨店に行く人は、造花や様々なことに使う紙類を買う。種るいは、金色。銀色。黒。赤。黄。緑。紫等の色紙に、仏に供え物の下に敷く半紙。

呉服屋からは、死者に着せる着物を造るサラシ木綿か、白木綿を買って、死者の身近な女の人が縫うのだが、縫う物の種るいは、着物。手甲。脚絆。額につける三角の布。全部手縫で、死者に使う物を縫う場合は、糸の端に結び玉を造らないで縫う。引張ったら抜ける様な縫い方だが、理由は今では判らない。ハサミも出来るだけ使わず、手甲や、脚絆の紐は歯で切り裂いた。

死者の体には、着物を着せ、手甲は手に脚絆は足に縛り付け、頭に三角の布の鉢巻をして、足袋をはかせる。死者の着物については大体その様であったと思う。

一方大工仕事は、先に書いたが、棺、墓標卒搭婆。輿。天蓋。机。膳。灯籠。六地蔵。竜頭等を鉋をかけて造るのだが、本職の大工でも二人で一日では仕上らない、二日位はかった。だから、本当に出来のよい物は、使い終ったものを、お寺に預けて次に使いたい人に使わすということもあった。

花造りの方は、四花は簡単だが。蓮や菊となると可成りの技術を要した様だが、その説明は一寸今は出来かねるが、花びらや、葉等は型紙があってそれに合せてはさみで切って、しわを造ったり曲げたりして造る。昔は素人の人で器用な人は、型紙を持っていて花造りは必ず頼まれた。

炊事の、女の人の用も大変で、昔は精進料理だから、豆腐、油揚げ、コンニャク、コンブの外は野菜ばかりだった。喪家にない品物は手伝いの人がそれぞれ持ち寄って料理をした。三・四日かかるようだと、米の一俵以上二俵使った話を聞いている。

昔は土葬が多かったので、墓に穴堀りに行く役目も大変だった。野狐や野良犬に掘じり出されては大変だったから、墓地の係りは、スコップ、ツルハシ等を持って行くときは、炊事の方から、道具清めとしての酒と、弁当お菜を貰らって、堀り終ったら清めて呑んで。弁当お菜を喰べて帰る。

大正二年に生れた私は、大正七・八年ごろから昭和の始めころの記憶もあるが、自転車が未だ何処の家にもないころ等、お互いの用は歩きか乗り馬なので、日時がかかることは当然だったろう。

その当時は、棺は立棺として、死者を座らせたようにして納棺をした。寝棺になったのは、たしか火葬場の建物が出来て、窯が出て来てからだった様に思っているが。寝棺にしたら窯口から中に入れ易いということ。

お通夜、告別式

お通夜と告別式は殆どの家では、自宅で行なった。坊さんが来て弔うことは、現在と大して変化がないので省きますが、

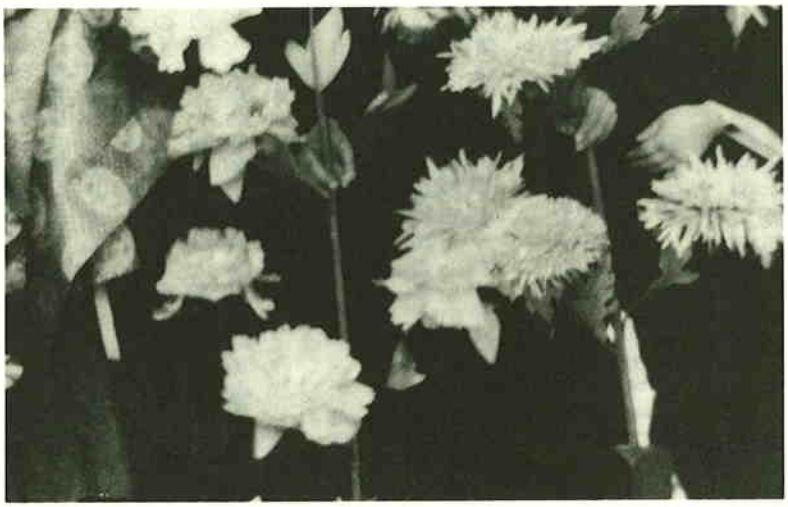
出棺

葬列の棺をかつぐ者、輿があれば四人、輿のない棺は二人、二人でかつぐ場合は、白木綿を紐にして、棺箱の下から回して、白晒し木綿を巻き付けたかつぎ棒に結び付ける。縄は使うものでないと言われていた。

かつぐ人は孫とか甥とか、故人の身近な人ということであったが、孫や甥が小さいときは、他人がかついでくれる場合は、孫や甥を棺の両脇につかまらせて歩いた。

告別式が終り棺が外に出たら、近親者が棺の回りに列になって、左回りを三回して墓地の方に向った（現在こういうことは全くやらなくなった）。三回廻る理由は、故人が住んでいた家又は土地をはなれる最後の別れで、名残を惜しむ意味であったとかと聞いていたが、そんなことでせう。

写真一
手造りの蓮の花



写真二
手造りの菊の花

写真三
手造りの四花

葬儀の服装

葬儀の服装は親族の人は、羽織、袴、女は白い着物（白無垢と言った）を着て、頭に白い布をかぶり、白足袋と白づくめであった。組内の人や知人手伝いの人等の服装は、現在の様にそろった服装等殆どせず。個人の持っている衣類の中の垢のついていない程度であったら。それを着て葬儀に来たものだった。服装が、故人の身内も他人も、男も女も黒づくめになってしまったのは、昭和四十年前後だろうか？

葬列

葬列は、市街地の故人の場合は、家の建ち並ぶ端まで行列をした。在の方の農家の方では故人の家から、号線道路まで行列をし、そこで、開拓当時は、土橇に棺や墓地に持って行く品々を乗せて馬に引かせた。冬は馬橇であった。金輪の馬車が誰かが手に入れたら、それを借りて運ぶようになったら、大変に楽になった話があった。

葬列のとき、棺に晒木綿を巻き、長く伸ばして、近親者は、その布を手につかんで歩いた。お墓に着いたらその布を外すが、その布を、妊娠している人が貰って腹帯にすると、お産が楽に出来ると言い伝えがあった。

葬列の先導は、燈籠、旗二本、花、竜頭、四花六地蔵、位牌、近親者、一般会葬者、旗二本、燈籠の様な順番の様に思うが、はっきりした記憶がない。

野辺送りの葬列が解散したら、そこからは身内の一部と。火葬の手伝いの人が墓地に出発する。墓地の入口に来たら、六本ローソク立てた六地蔵を道路脇に立てる。

昔の葬儀は、午後からしたので、告別式終らせて、葬列作って歩き、土橇か、馬橇又は馬車に乗せて、墓地まで来たら、冬なら日が暮れている。お墓に着いたら棺を下し、遺族は最後の別れをする。

土葬の場合は、会葬者の手にて棺を穴に入れ、遺族が少し土をかけて、会葬者に後の土かけ等を頼み一足先に家に帰る。会葬者は後の土をかけ、墓標を立て墓の形を整えて終るのだが、火葬の場合は大変な仕事であった。

火葬場に建物のない時代が、昭和十年以後まで続いた。その建物が出来たのも、地域地域の関係者が話し合って、資金、材料、労力等出し合って最初は建てたらしい。火葬場の建物はだから村内に出来たのは、若佐の中園が昭和十一・二年ごろ出来、佐呂間のは昭和十六、七年ごろだったと思います。それぞれの顔役が発起人となって作ったようです。

露天の火葬の話に入りませう。

露天の場合は、開拓当初から、第二次世界大戦後数年間は、佐呂間は、木材が豊富であったから、薪を燃やしての火葬であった。薪を先ず桟に組み重ねた上に棺を乗せ、棺の回りにも薪を立かけ、棺の上にも薪を乗せて石油をかけ、遺族が最初の火を付け燃え始めたら、遺族は後のことを頼み家に帰る。

残った組内の手伝いの人は、炊事から持って来た清めの酒を飲み、野菜、コンニャク、油上げ、コンブ等の煮付けや野菜の漬物等や、弁当等を食べながら四・五時間以上もかかって、薪を入れ足し燃やす。遺体が白骨になるのを見計らい又薪を入れれて、その薪が燃えつき残り火で、完然に白骨化する様にと見定めて帰る。もう時間は真夜中ということが多く、墓地から遠い家など歩きだから時間がかかることばかり。火葬した手伝いの人は、それから御馳走になって帰るのだ。

昔は、葬式に参加してくれた人には、必ず万じゅ五つづつ配ったことだった。

火葬の場合は、翌朝お骨拾いに遺族の者又親しい近所の人達が、骨箱外供え物等持ち、お墓に行きお骨を拾い、残り骨や灰等は、お墓に穴を掘り埋める、墓標を立ててお供えをしてお参りして、葬儀が終る

昔の葬式の苦労話

冬の大雪の降り続く時、組内にしても、親戚にしても大変な仕事、お互いに知らせる連絡から、買物、墓まで道付け、馬橇で火葬の薪運び、薪二尺薪（六十センチ位い）、大さは一五センチから二〇センチ位いの六・七〇本から一〇〇本位い必要、号線道路は何とか馬橇で雪降り続きでも運べても、墓地までは、かんじきで踏み固めて、手橇で人が運ばねば

ならないようなときもあった。佐呂間開基百年目近い今、ブルで道付け自動車で全部運んでしまうし。薪等のような重い物も必要なく、全く大きな変り方だ

土葬の場合の大雪のときは、これも又大変大雪をはねて、地面に大きな穴を掘るのだが、浅い穴では駄目だから四・五人で交対で掘るが、この仕事のときは、清めの焼酎飲み飲み掘ったものだった。

お通夜の日まで天気よかったのに、葬式の日の朝から吹雪になったりして三日四日葬式の出せないことが永年の間に幾度もあったが、この様な話は、今のうちに書き残しておかないと忘れ去られるでせう。

今もお互い助け合うが、昔は実によく助け合った。必要な道具や、葬式に必要な喰べもなどの融通し合って、畠に埋めてある野菜を大雪除けて出すこと等、仕事はいくらでもあった。

昔の木造の板張り住宅は、野菜はすぐ固く凍るから。大勢が食べる幾日も続く一つの葬式に。女の人も大変な苦労があった。

文　責　小島善之丞

昔は人魂が飛んだ話がよくあった

露天での火葬の頃、その後もあったかどうか、人魂が飛んでいるのを見た人がいて、話の種になって、屋内にトイレのない家がずい分あって。子供などそんな話を聞いたら、夜トイレに行きたくなっても、恐ろしくて一人でトイレに行けないと言うことだった。

人魂は、殆ど墓地の方から、ふわりふわりと飛んだというが、墓地以外の方からも飛んだ話もあった。

人魂のことを考えると、明治、大正、昭和の始め頃までは、現在の耕地になっている佐呂間町内は、まだまだ大きな立木が生えていて、現在程見通しの出来ない頃であった上、何処かで、死者が出来ても関係ない地域の人には、殆んど知ることがなかったから、墓地での露天の火葬のとき、青白く燃え上る炎が、森や林越しに見ると、火の玉とか人魂とかに見えたりしたのだろうか、私は現在朝日の自治会にいる、元の下武士。昔は三六号道路から下の方は、佐呂間の墓地を使用した。上は現在の中園の基地を使った

下武士に、死者が出た場合、現在の西富、昔は西区といったが。下武士の葬式は、西区の人は殆んど、親戚知人以外は知ることがない。今の西富にある墓地等は。森の中の藪でそれわそれわ気持のよくない雰囲気で、三三号道路から、お寺の横を通って、旧桜橋も大きな木の生えたのに囲まれ、三一号当りまでは淋しところだった。おそらく、佐呂間の中では、何処の地域でも、墓地の場所は。似たり寄ったりであったと思う。

人の骨の中にある燐分が火玉とかの話は火葬場に、窯の設備が出来たころから段々と消えて行ったように思っていますが、最近は殆んどそんな話はないのではと思います。

最後に。この記事書くのに、佐藤常雄君。川村富蔵君等に度々お知恵を頂いたこと付け加えておきます。

編集部より

平成二年一〇月二一日に、昔の葬儀について小島氏の原稿を元にして、懇談会に出席してくれた人。杉本磐。山口光友。小島善之丞。宍戸清信。高田能夫。徳永良行

其の後に、矢吹俊治氏に、色々と聞いたこともこの記事の中に、編集部で付け加えてあります。

文責　小島善之丞